『モンゴル研究』Монголын судлал.
『歴史研究』Түүхийн судлал.
『言語文學研究』Хэл зохиол судлал.
『口頭文學研究』Аман зохиол судлал.
その他。

モンゴル人民共和國
科學アカデミー　編

一

近年におけるモンゴル人民共和國の學術文化の興隆にともない、この國の學術的出版物の、世界のモンゴル學界において占める位置が、最近、識者によって重視されるに到っている。この現狀に鑑み、筆者は、モンゴル人民共和國で出版されている多くの學術的研究誌の中で、特に本誌「東洋史研究」に關連するところの多いと思われる二、三の學術機關誌をこゝに紹介し、その内容の一部にふれ、紙數がゆるせばモンゴル國内における最近のモンゴル研究の若干の問題に言及したいと考える。

二

一九五九年の第一回國際モンゴル學者大會は、當時のモンゴル科學・高等研究院（Шинжлэх ухааны, дээд боловсролын хуурэлэн, Commitee of Science and Higher Education）の主催によってウラーン・バートルに於て開催された歴史的な大會であったが、その「科學・高等教育院」が改組されて、一九六一年に「モンゴル科學アカデミー（Бүгд найрамдах монгол ард улсын шинжлэх ухааны академи）の設立を見た。そして、このアカデミーの設立の前後より、標題にかゝげた數種の學術機關誌の發行が本格化し始め、一九七二年の現在、モンゴル語學文學、モンゴル史、モンゴル考古學、モンゴル民族（俗）學などの諸研究分野では、これ等の機關誌が、その存在を無視し得ない質と量を示すに到っている。

さて最初に、『モンゴル研究（Монголын судлал）』を取りあげよう。

この書が、『モンゴル研究』なる名稱のもとに、現在の體裁をもつようになったのは、私の知る限りでは、一九六五年の“Монголын судлал. Tomus V, Fasc 2—7. Улаанбаатар”からであり、それ以前は“Монгол судлалын зарим асуудал”（モンゴル研究の諸問題）〔Tomus III Fasc. 1—5, 同 Tomus III Fasc. 6—11, 同 Tomus IV Fasc. 10—21〕として發刊されたり、或いは、更に以前には、“Studia mongolica”の名を冠して、モノグラフの小冊として刊行されたりして、Studia mongolica として整理しておかないと混亂を來たす恐れがある。

この“Studia mongolica”の Tomus I, Fasc. I は一九五九年に刊行されているので、本年まで十年以上絶えることなく續いていることになる。現在の體裁の『モンゴル研究』になってから、最新刊の“Монголын судлал. Tomus VIII, Fasc. 1—25”まで全部で八冊、筆者はその全巻を所有している。この八冊の内容は、なかなか讀みごたえのあるものが多く、モンゴル人民共和國に於ける最近の學術文化の充實向上をうかがうことが出來る。

さて、『モンゴル研究』という學術誌が、いかなる性格をもつものであるかを知っていただくために、最新刊の二冊『モンゴル研究』第七卷、第八卷の目次を煩を厭わず譯出する。

〔Монголын судлал. Tomus VII, Fasc. 1—26, Улаанбаатар, 1970. Studia mongolica, Institut Linguae et Litterarum Akademiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongolici.〕

1 エム・ガーダムバ——成吉思ボクドの九傑と ончин хуугийн цэцэлсэн шашдир（孤兒賢話）の史的基盤。 2 エム・ガーダムバ——チョー・メルゲン（Чуу Мэргэн）とは誰か。 3 ディー・ツェレンソドノム——トルファン蒐集品の第二冊のTM一五一。 4 シャー・ビラ——ダンディの "Зохисгалгүүны толь"（適切なる音律の辭典）をチベット語に飜譯した Лакшимакара, Шондон-Доржжалцан に關する二通の手紙。 5 チェー・アルタンゲレル——新發見の目錄について。 6 ツェー・ダムディンスレン——兎についての說話。 7 エ・ロブサンチュルテルム——學者ダンダーについての覺えがき。 8 オー・ザグドゥスレン——"Урт сайхан хүрэн"（長く美しい褐色の馬）なる歌の史的基盤。 9 シャー・ナツァクドルヂ——"Лам ялдам бурхан"（ラマ僧、ヤダム・ボルハン）という歌について。 10 オー・ザグドゥスレン——"Хан хөхүй"（ハン・ホフイ山）讚歌。 11 ツェー・ダムディンスレン——"Дөрвөн жанжин гүн"（ルー將軍公）に關する傳說。 12 ディー・ゴムボヂャブ——史實と關係ある二、三の土地傳說について。 13 ベー・ソドノム——ある歌のこと。 14 ディー・ツェデーブ——革命歌における國民歌の傳統の問題。 15 ディー・ツェンドゥ——エル・バダルチの文學作品。 16 シャー・ロブサンワンダン——言語における相補、不相補の問題。 17 ゲー・スフバータル——契丹の古代文書に關する報告。 18 ジェー・ツォロー——アル・ハンガイ・アイマクの北部諸ソムのハルハ方言、及び口頭作品の研究。 19 ジェー・トモルツェレン——ハルハ方言のひろさの調和について。 20 ヂャミヤン——トド文字の正字法に於て長母音を如何に表記したかの問題。 21 ベー・ビャンバサン——若干の動詞語根について。 22 ディー・トモルトゴー——モンゴル語の數詞 "2 (хоёр)" の構造に關する問題。 23 ティー・ダシツェデン——現代モンゴル語の具體名詞の數に關する若干の覺え書き。 24 ゲー・ミヂドゥドルヂ——滿洲・モンゴル語の接辭 -qan, -ken について。 25 ツェー・シュゲル——木版本の生產。 26 チェー・ナムスライヂャブ——モンゴルの辭書學。

〔Монголын судлал. Tomus VIII Fasc. 1—25, Улаанбаатар, 1971. Studia mongolica, Institut Linguae et Litterarum Akademiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongolici.〕

1 エス・ロブサンワンダン——モンゴル人の文學遺產の研究について。 2 エム・ガーダンバ——『元朝祕史』、モンゴル口頭文學に關係ある諸問題。 3 ディー・ツェレンソドノム——ザヤ・バンディダの詩について。 4 ツ

ェー・ダムディンスレン——天女物語。　5　オー・ゾァグドゥスレン——ある歌の寫本について。　6　オー・ゾァグドゥスレン——ゲミン（中國の國民黨）についての二つの歌。　7　ディー・ヨンドン——『言葉』という作品について。　8シャー・ナツァクドルヂ——odqan と otuq。　9　ゲー・スフバータル——中央アジア諸民族における文字の出現の問題によせて。　10　ゲー・スフバータル——鮮卑などの美術、建築について。　11　シャー・バライシル——モンゴル語の親族語の副詞について。　12　ベー・ヘンヂン——文體論と作家の文體。　13　ティー・ダシツェデン——現代モンゴル語の名詞の總數（ерөнхий тоо）と明示數（тодорхой тоо）の若干例。　14　エル・カー・ゲラシィモヴィッチ——モンゴル語のアクセントの特徴の問題によせて。　15　ディー・トモルトゴー——中世モンゴル語の母音の同化。　16　ヂェー・トモルツェレン——バルバ方言に關する要記。　17　ミヂッドドルヂ——モンゴル語、滿洲語、複合語について。　18　ベー・ソドゥノム——モンゴルのエスギー・ゲル（フェルトの家）の名稱。　19　ツェー・シャクダルスレン——モンゴル化した外氏族に關する覺えがき。　20　エフ・シネフー、ツェー・シャルフー——記錄簿に現われる若干の名、表現。　21　ツェー・シュゲル——木版本の文字。　22　ベー・リンチェン——トド蒙古文字、その文化的意義。　23　イー・カーイリシチン——ソヴィエト時代に於けるカルマク文語の發展。　24　ベー・ソドゥノム——トド蒙古文字によって書かれた文學作品から。　25　アー・ベー・バドゥマイェブ——カルマク民族文化史に於けるザヤ・バンディダの役割。

以上の目次を通觀して知られるように、この『モンゴル研究』誌には、モンゴル學のいわば殆ど總ての分野——歷史、言語文獻、民族（俗）、口承傳說などの學問分野——にわたって多くの論文が掲載され、各々の論文の質も概して言えば、決して低いとは言えない（尤も、私は言語關係の論文の他は、その質についての評價力をもっているわけではないが）。例えば M. Гаадамба 教授（ウラーンバートル大學、モンゴル語學文學科教授）の一連の研究の中で、特に『元朝祕史』の言語や內容を取扱った論文の中には、種々の點で啓發されるところの多い好論文が多い。Ⅷ卷の上掲論文「元朝祕史——モンゴル口頭文學に關係ある諸問題」は、中でも「祕史」研究の從來の研究を一段と進めたものとして、高く評價されると思う。又、Ⅶ卷の Жамьян 氏の論文も、トド文字に於ける長母音の表記の問題について優れた新說を提出した好論文であり、更にⅧ卷の Т. Дашцэдэн 氏の現代モンゴル語の名詞の數についての論考も興味ぶかい。言語についての論はこの他にも Ц. Бямбасан, Г. Мижидлорж, Д. Темертогоо, Ж. Цолоо, Ж. Темерцэрэн など現代モンゴルに於ける若手研究家の活躍を示す幾つかの論考も見られる。

又、長老 Ц. Дамдинсүрэн 教授の健筆になる三論文をはじめ、Б. Ринчэн 博士、Б. Содном 教授の顏も見え、長老教授陣の相變らぬ活躍ぶりも知られる。

歷史關係の論文は鮮卑、匈奴などの研究家 Г. Сүхбаатар 氏の

數論文の他に、Ш. Нацагдорж 教授の "otqan と otuy" のみで、さびしい感じであるが、今のモンゴルでは言語研究家に比して、歷史學者の方が少ないことを反映しているものと見られないだろうか。尙紙數の關係で、論文の內容に簡單にふれることも出來ないことをお許し願いたい。

次に、『歷史研究（Түүхийн судлал）』に移ろう。この機關誌は、モンゴル科學アカデミーのТүүхийн хүрээлэн（歷史院）の發行する三誌の中の一つで、主として歷史學プロパーの論說が發表される。序でに書くと、他の二機關誌は、一は "Угсаатны зүйн судлал（Studia ethnographia）（民族學研究）" で、他の一は "Археологийн судлал（Studia archeologica）考古學研究" であって、廣義の歷史學關係の學術論文は上述の『モンゴル研究』と以上の三機關誌のいずれかに發表される。歷史院は、この他にも "monumenta historica" としてモンゴル語の資料そのものの刊行にも意をはらっている。

『歷史研究』も當初は小冊のモノグラフが多く、私が所有しているもので、數論文を掲載した、まとまった形の本は、

Түүхийн судлал Tomus VIII, Fasc 1—12. Улаанбаатар. 1969.

Түүхийн судлал Tomus VIII, Fasc 13—24. Улаанбаатар. 1970.

の二冊のみである。このような體裁の本として發刊されるようになったのは一九六四年の Tomus VI ごろからであるらしいが現物をまだ見たことはない。

さて、『歷史研究』の內容を知っていただくために、上記二冊に收められている論文名を以下に掲げる。

Tomus VIII, Fasc. 1—12.

1 エヌ・セルーオドヂャブ——バヤン・オルギー・アイマグの考古學遺跡の研究。 2 ディー・ナバーン——鹿石とその諸形態。 3 ディー・ドルヂ——岩石畫再說。 4 ゲー・スフバータル——匈奴と鮮卑間の人種關係について。 5 ツェー・ハンドゥスレン——柔然の生活、文化、習慣について。 6 ハー・ペルレー——三河地帶モンゴル人の口碑の跡を追う。 7 ディー・ゴンゴル——オボル・ハルハ五部の三部は何處へ行ったか。 8 ツェー・ソノムダクバ——ハルハの四アイマグの數ホショーについて。その起源と名稱の變更（一六九一—一九二四）。 9 ツェー・ナサンバルヂル——エルデネ・バンディタ・ホトクトの弟子達。 10 エル・ドゥゲルスレン——ハタンバータル・マクサルヂャブがウリヤスタイの街を白衞軍から解放したこと。 11 エム・サンヂドルヂ——代表官吏。 12 エヌ・ダンガースレン——草刈りスタンツの歷史に關する若干の研究。

Tomus VIII, Fasc. 13—24.

1 シャー・ナツァクドルヂ——レーニンとモンゴル史研究。 2 ディー・ゴンゴル——十月革命の影響によって興った民族的自由獲得運動と革命的祕密グループ。 3 エム・サンヂドルヂ——モンゴル人民共和國行政組織の變革と發展。 4 ベー・ダシツェベグ——ラマ僧達を社會的に有益な勤勞に移したこと。 5 デー・ダシヂャムツ——チェー・デム

チグドルヂの作品における若干の進歩主義について。
6　エム・サンヂドルヂ――最初のネグデルの歴史的道程。
7　シャー・ナツァクドルヂ――モンゴルの僧院によるアラット搾取の形と方法（露文）。　8　シャー・ビラ――≪白い歴史≫の分析と著作年代（露文）。　9　ハー・ペルレー――≪シャラ・トーヂ≫の作者について。　10　ツェー・ナサンバルヂル――ヂェブツンダンバ・ホトクトの財産。
11　ディー・ドルヂ、アー・ペーヂェレビャンコ――東モンゴルの新石器時代の新研究（露文）。　12　ディー・マイダル――モンゴルの建築裝飾について。

以上の内容から『歴史研究』誌は、考古學をはじめ、モンゴルの古代、中世、近世の歴史の研究を幅廣く含めた機關誌であることが知られるが、特にモンゴルの現代史の範疇に入れられる類の研究が、幾つか見られることは注目に値しよう。個々の論文について言及する餘裕はないが、ハー・ペルレー氏の雄篇「三河地帶のモンゴル人の口碑の跡を追う」の論旨については、專門のモンゴル史家の御意見をおきゝしたいものだと思う。そのために、現在この論文を日本語に飜譯中であることを附記する。誠に不十分な紹介で申し譯ないが、紙白の都合で次に進ませていただく。

『言語文學研究(Хэл зохиол судлал, Studia linguae et litterarum)』は一九六〇年から刊行され、やはり最初の内は小冊が多く、現在のような内容の豐かな機關誌になるまでには數年を要し、一九六四～五年ごろから、ほゞ現在の體裁のものに定着し始めたといえる。モンゴル語及びモンゴル語文獻に關する研究、モンゴル文學についての論考を主な内容とする。この『言語文學研究』は、モンゴル語學、モンゴル文獻學の研究に從事する者にとっては、見落すことの出來ない存在であり、現代のモンゴル人學者の自國語の研究の成果が次々に發表され、特に、現代モンゴル語諸方言の研究は、今までその種の研究にたずさわり得なかった我々には、貴重な資料を提供してくれることが少くない。參考までに、以下に、最も新しい『言語文學研究』に見られる論文名のいくつかを掲げる。

Хэл зохиол судлал. Tomus VIII, Fasc. 1—12, Улаанбаатар, 1970.

エル・ベシェ――モンゴル語の動詞變化の歴史についての若干の注記。　ペー・ビャムバサン――現代モンゴル語の動詞の態と相。　ベー・リンチェン――モンゴルの詩について。
エー・オヨン――問答歌の若干の問題。　ヂェー・トモルツェレン――モンゴル語の音節收縮法則。　デー・トモルトゴー――モンゴル語研究に於ける名詞曲用の分類。
デー・ツェレンソドノム――モンゴル語ダンヂュールの最後の詩。　ツェー・シャクダルスレン――『モンゴル祕史』の тоног という語について。

以上の論文名から、この機關誌の性格を知っていたゞけるものと考える。

最後に『口頭文學研究』を簡單に紹介して拙文を結びたい。

モンゴル科學アカデミーの歴史院（Түүхийн хүрээлэн）が上述の『歴史研究』、『民族學研究』、『考古學研究』の三誌を主宰して

いるように、言語文學院（Хэл зохиолын хүрээлэн）の編纂の下に『モンゴル研究』、『言語文學研究』、それにこの『口頭文學研究 Аман зохиолын судлал』の三誌が刊行されている。そして、まとまった一つの機關としてのアカデミーの紀要は、別に БНМАУ Шинжлэх ухааны академийн мэдээ《モンゴル人民共和國科學アカデミー紀要》というのがあり、一九六一年以來今年まで季刊として年四回發行され、すでに四十數冊にのぼっている。なお、六一年より七一年までの紀要は全卷筆者の下に揃っている。

さて、『口頭文學研究』は、一九五九年から刊行され、一九六六年頃までは、專らモノグラフで、現在のような論文集の形をもったものは、一九六八年の "Аман зохиолын судлал. Tomus VI, Fasc. 1—14" からであろう。この機關誌にはモンゴル文學の中で一つの大きな領域を占める Аман зохиол《口頭文學作品》には、「ベー・ホルロー——モンゴル口碑的敍事詩の若干の問題」、「ベー・ホルロー——モンゴルの諷刺文學の特長」、その他いくつかの論說が掲載されている。又、昨年一九七二年にも "Аман зохиол судлал. Tomus VII, Fasc. 10" が刊行されている。

以上、モンゴル科學アカデミーの刊行になる出版物の中、特に本誌「東洋史研究」にふさわしいと思える若干の機關誌の紹介を行なったが、何分にも忽忽の中に筆をとったのと調査準備の不十分のため、内容のとぼしいものになってしまったことをお詫び申し上げねばならない。たゞ、現代のモンゴル人民共和國に於ける學問水準の一端をこの拙文で窺っていたゞけたとすれば、私としては大きな喜びである。

（小澤　重男）